



文部科学省「令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」

「ともにいるだけで」 「学びになる」 わくわく ワークブック

文部科学省「令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」
ともにいるだけで学びになる わくわくワークブック

発行 2024年3月
発行者 認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ
編集 石幡愛、内田翔太郎、ササキユイチ
取材協力 浜松市
デザイン 安達彩夏(design hotori)

お問合せ先 認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ
〒430-0939 静岡県浜松市中区連尺町314-30 たけし文化センター連尺町
電話 053-451-1355
メール lets-arsnova@nifty.com
ホームページ <http://cslets.net/>

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ



はじめに

わたしたちクリエイティブサポートレッツ(以下、レッツ)は、障害や国籍、性差、年齢などあらゆる違いを乗り越えて、様々な人が共に生きる社会を、アートや文化を通して実現することを目指すNPO法人です。2000年から静岡県浜松市で活動しています。

このワークブックは、重度知的障害のある人を核に多様な人同士が会う場をつくってきたレッツの実践を紹介することを通して、どうやったらいろんな人たちがともにいて学びになる場、ワクワクする場になるのかを、みなさんと一緒に話し合ったり考えたりしていくきっかけになるようにつくりました。特に文化施設や公共施設などの人が集い学びつながる場所に関わる方々に、ぜひ手にとっていただきたいと思っています。

本書は3つのセクションに分かれています。それぞれのセクションごとのテーマに沿ってレッツのこれまでの実践例を紹介しています。それらの実践例からともにいるために大切なことをポイントとしてまとめました。さらに各セクションの最後には、これからの学びの場について考えたり、発想を広げるためのワークがあります。ぜひ、自身の問いを深めながらもややと、あるいは一緒に考えたい仲間を募ってわいわいと、ワークに取り組んでみてもらえたらうれしいです。また、セクションの合間では、2023年にレッツが取材した静岡県浜松市内にある協働センター*で行われている様々な取り組みの一端を、コラムとして紹介しています。

個人が何かを習得して能力を高めていくこ

とだけが〈学び〉ではありません。意図しない出会いに驚いてワクワクしたり、ときには揺さぶられてもややもしたりすること。本書では、生きるなかで誰もが持ちえる〈学び〉のそういった側面に光を当てたいと思っています。

いざ、ともにいるだけで学びになる世界へ!

*協働センター…コミュニティ活動を通じた活力ある地域づくり及び生涯学習の推進を図るために設置された浜松市の施設。2013年、浜松市内の公民館に地域づくりの拠点機能が付加され、協働センター、ふれあいセンターに再編された。

目次

はじめに … 1

セクション1 | ともにいるのがむずかしい場だったら

- 実践例① たけし文化センター-BUNSENDO … 2
- 実践例② 共生社会コンファレンス2022「ともにいるだけで学びになる」… 3
- わくわくワーク|ともにいるロビーの妄想プランをつくる! … 4
- コラム 野嶋京登さん(浜松市富塚協働センター コミュニティ担当職員)・佐藤拓男さん(浜松市北部協働センター 所長) … 5

セクション2 | もややもしたり、異なることでぶつかったら

- 実践例③ かたりのヴぁ … 6
- 実践例④ しえんかいぎ … 7
- わくわくワーク|哲学対話をやってみよう! … 8
- コラム 高橋久美子さん(浜松市浜松手をつなぐ育成会)×大平智史さん(浜松市曳馬協働センター コミュニティ担当職員) … 9

セクション3 | 混ざるとうまれるあれやこれ

- 実践例⑤ ちまた公民館…10
- 実践例⑥ みにみにアルス・ノヴァ…11
- わくわくワーク|居心地のよさってなんだろう?…12



SECTION 01

ともにいるのがむずかしい場だったら…



こうやってみた！
実践例①

たけし文化センター-BUNSENDO

浜松市の中心市街地の元書店を活用して期間限定でオープンしたスペース。そこは重度知的障害のある「くぼたたけし」という個人を全肯定することを第一義に設けられました。子ども連れの家族、高校生、ひきこもりがちな大学生、アーティストなどが来場し、それぞれのやりたいことが同時多発的に行われ、約200の小さなイベントが生まれました。



Navigator
久保田 翠
レッツ理事長。久保田社の母。社会の排除/不公平への怒りから価値観を覆すレッツの活動を開始。

障害のある〈個人〉を全肯定する〈公共〉空間

たけしはお茶があると手を突っ込んだり、静かにしていきやいけない場で大声を出したりするので、公共の場では排除され続けてきたんです。でも、たけし文化センター-BUNSENDOでは、それを問題行動だとせず彼を排除しないと決めたことが画期的でした。

そんなコンセプトづくりと場の設えはふたりのアーティストが担っていて、その方針を象徴するようなものが置かれていました。手の届かない高さのカウンターと審判台のハイチェアを使ったカフェ

スペース、キャスター付きでいつでも動かせる家具、破ってもいいポスターなど、たけしを全肯定したうえで、他の人と共存できる空間を考えてくれました。

実は、カフェスペースは設営の時点でたけしに攻略されたんです。でも、お茶をめがけてたけしが突っ込んできたら、飲んでる人がお茶をスッと持ち上げればいわけじゃないですか。汚されたら拭けばいいんだし。空間の問題ではなく、そこに居る人の対応の問題なんです。事故が起きたらどうするとか起きてもない

ことを怖がってやめがちですが、何か起きてから考えればいい。「誰が来てもいい」と確信を持って思えるかどうかだと思います。

結局、ザワザワして、たけしはそれほど居られなかったんですけど、でも、彼がリスペクトされている光景は確実に伝わって、マジョリティの意識を変えたと思います。



このセクションでは、あなたの関わる場が誰かを排除するものになっていたらどうしたらよいかを考えます。使う人の特性に合わせて場所を分けたら解決するのでしょうか？しかし、それではいろいろな人同士が出会う場が社会の中からなくなってしまいます。環境や仕組みを変えたり、あたらしいコンセプトを生み出すことで、ともにいることを実践した事例を紹介します。



こうやってみた！
実践例②

共に学び、生きる共生社会コンファレンス

文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」事業報告としてコンファレンスを開催。障害のある人、支援者、外から遊びに来る人や街で出会う人たちが、ともに生活や活動をつくっているレッツの事例をもとに、常識に囚われず、感性をひらき、互いに折り合いをつけていくアートの発想について対話しました。声が出たり、体が動いたりする方も参加できる会場をつくり、コンファレンスそのものが「ともにいるだけで学びになる」というテーマを体感できる場になりました。

ともにいる空間は、ともにつくられるもの

会場はステージと客席があるホールだったのですが、前を向いて座って聞くというふうに居方を限定する空間でした。そうすると、マッチしない人が居づらいし、他の人も特定の居方を想定してしまっただけで外れる居方に対して「良くない」と見てしまう。なので、外せる椅子は全部外してカーペットを敷いておもちゃを置きました。ホールにはいられないけれど話は聞きたい方も想定して、楽屋を一般開放してモニター越しに聞けるようにもしました。

子どもの面倒を見るのが好きな

中学生にベビーシッターとして参加してもらったら、子どもたちと紙飛行機を飛ばしまくってくれてよかったです。登壇者全員で対話する場面では、重度知的障害のある方がステージ上でうろろろはじめて、それを見て子どもたちもステージに上がってきたり。

きっかけは登壇者のお一人に「子どもを連れて行ってもいい？」と言われたことでした。ちょうど広報を出すタイミングだったので、それならちゃんとチラシにも書いたほうがいいのかと思って、アナウンスすることは大切だと思います。当事

者が子連れでも行ける場なんだと思えるようにというのがあるけれど、他の参加者もそういう場なんだと分かる。当事者が工夫するだけじゃなくて、周りも工夫しようってことですね。例えば、子どもの声で話が聞きづらいなら、聞きやすい席に移動しようとか。

逆に、そういう設えにすると「集中できなかった」という戸惑いの感想をいただくこともあります。空間自体がどうかということよりも、そうしてニーズを言い合える環境になっていることが大事だと思います。



Navigator
高林 洋臣
障害福祉施設アルス・ノヴァの支援員。わかりあわないままとともにいる日々豊かさを感じている。



POINT

- ☑ **障害は個人と環境や社会との「あいだ」にあるもの**
環境や対応の仕方が変わると、困りごとが困りごとではなくなる。
- ☑ **積極的に多様な人を歓迎することをアナウンスする**
当事者にとっても、周りの人にとっても、意識するきっかけになる。
- ☑ **場をともにする人同士が調整しあえる環境**
異なる人が出会ってやりとりをすることから創造的なアイデアは生まれる。



ともにいる「ロビー」の妄想プランをつくる!

公共施設のロビーを、もっといろんな人が過ごしやすい場所に大改造。
そこにはどんなものや、どんなルールがあったらいいのでしょうか？ イラストも交えて、妄想設計図を描いてみましょう。

DJブースのある
ロビーはどうか。
踊れるロビーだったら、
ちょっとした違和感は
どうでも
よくなるかも。

にぎやかなのが
苦手な人もいるよね。
でも、静かじゃないと
いられない場所
ばかりなのって
どうして？



コラム 地域コミュニティの原点は楽しい時間を共有すること

浜松市の閑静な住宅街にある
富塚協働センター。地域の住民
と富塚協働センターが行っている
「あおぞら協働センター」につ
いて、同センターのコミュニティ
担当職員・社会教育士の野嶋京
登さんにお話を聞きました。



— 「あおぞら協働センター」ってどんなもの？

「あおぞら協働センター」は移動式屋台型の公民館です。私が研修として沖縄県那覇市の若狭公民館による「パーラー公民館」の取り組みを見に行ったことがきっかけで、地域のみなさんと浜松でもやってみよう、2019年から始めました。富塚協働センターの近くにある佐鳴湖公園の広場に大きなパラソルを立てて、アーティストによるワークショップをやったり、集まった人でお喋りをしたりします。6月から12月頃まではほぼ毎週末実施していますよ。事業は別に建物や場所にこだわらなくてもいいんです。大切なのは、人が集まると何かが起こること。偶然出会った人がここでマジックやよさこいを披露してくれたことがあったり、出会った人同士が友人になって新しい活動が生まれたり、いろんなことが起こっています。

*コミュニティ担当職員 … 住民自治の充実や市民協働の推進、地域づくりのために浜松市内の協働センターなどに配置された職員。地域活動の相談やアドバイス、地域課題解決事業の実施などを行っている。 *パーラー公民館 … 黒板テーブルにパラソルを立てた移動式公民館。生活圏に公民館や図書館のない地域からの相談を受け、2017年に那覇市若狭公民館(NPO法人地域サポートわかさ)が始めた。現在は運営が地域団体に引き継がれて開館している。

— ともにいる場や時間をつくるために大切なことは？

協働センターは本来どんな人にも開かれたインクルーシブな場所です。地域には多様な人がいて、それぞれ異なる得意不得意や地域活動に対する温度感を持っています。私の仕事は地域の方の顔と名前を覚えて信頼関係を築きながら色々な人同士を繋げていくことです。「あおぞら協働センター」の他にも地域の声をかたちにしてたくさんの取り組みを行っています。いずれも一人の力だけでは何もできません。支え合いがあってこそ可能性は広がります。地域コミュニティの原点は楽しい時間を共有すること。誰かのためはもちろん、自分自身も楽しむこと、誰もがWin-Winの関係が大切だと思います。

Profile 野嶋 京登

化粧品会社の営業マンから、地元浜松でまちづくりに携わりたいためにUターン、2014年に浜松市職員に転身。2018年富塚協働センターに着任後、地域住民と「あおぞら協働センター」実施、一人のごみ拾いボランティアの声から発展した「ごみゼロフェスタ」開催、学生が活躍しやすいボランティア制度「コミュニティ・アシスタント」確立、若者たちと「アオハル音楽祭」開催などを行う。公民館・浜松市職員として「地方公務員アワード2023」初受賞。

コラム 地域をつなぐ場としての協働センター

北部協働センターは住宅街や工業地帯、航空自衛隊基地など、多様な地域性のある萩丘地区に位置しています。息の長い地域づくりの活動を支援してきた同センターの取り組みについて、所長の佐藤拓男さんにお聞きしました。



— 「北部ジュニア公民館」の取り組みについて教えてください。

北部ジュニア公民館は中学生ボランティアが企画運営しておけ屋敷や食品販売などで地域の子どもたちをもてなすイベントです。2001年に三澤純子さんという方がキーマンになり始めました。例年夏のイベント本番に向けて5月頃から毎月準備を進めていきます。企画決定から当日運営、最後の振り返りまで主体になるのはあくまで地域の中学生ボランティアです。それを活動のOBOGや北部生涯学習ボランティアの会のみなさんといった地域の大人たちがサポートしているんです。地域と学校と行政が協力してつくる、子どもたちの安心な居場所になっています。地域の一員という自覚を持ったり、異世代・異文化交流の学びの場所もあり、学校には行かないけれどジュニア公民館には参加して活躍するという子どももこれまでにたくさんいました。イベントに遊びに来て楽しい経験をした子どもがその後運営の担い手になるという循環が生まれています。地域活動をリードする存在が世代交代をして引き継がれているんです。

— 地域をつなぐ「Connecting People!」が合言葉と伺いました。

協働センターは、人が集いつながる場所でありたいと思っています。人が集うと情報も集まります。気楽に立ち寄れて雑談ができることで新しいアイデアも生まれてきます。2023年の北部協働センターまつりではセンターの創立50周年を記念して「ほくぶのどじまん」を開催しました。ここで活動する同好会の方々、中学生、外国にルーツのある方、学校支援コーディネーターの方、地域のお年寄りや視覚障害のある方にも出演していただきました。北部協働センターで日々活動しているみなさんが歌を通じてともにいるという場ができました。

Profile 佐藤 拓男

1975年浜松市生まれ。1995年浜松市役所入庁。上下水道・教育・道路管理・福祉行政に従事。2018年4月より北部協働センター所長。同センターのキャッチフレーズは「Connecting People!〜笑顔でつなぐ地域の輪〜」。特色ある事業として、23年続く地域・学校・行政が一体となり地域の中学生が企画・運営する「北部ジュニア公民館」。延べ3,500人のボランティアを輩出している。



SECTION 02

もやもやしたり、異なることでぶつかったら…

こうやってみた！
実践例③

かたりのヴァ

「哲学対話」のレッツ版。生活の中のふとした疑問、当たり前すぎて普段見過ごしてしまうような事柄からテーマを決めて、参加者が対話を通してそれぞれの考えを深めていきます。ルールは3つ。「1.他の人の話を最後まで聞く。2.体験をもとに自分の言葉で話す。3.聞いているだけでもOK。」話すよりも聞くこと、場をともにすることを大切に実施しています。



違いやズレを楽しむ対話の場

Navigator
尾張 美途
障害福祉施設アルス・ノヴァの支援員。マニアクな感性で生み出す摩訶不思議な遊びに気づけば誰もが踊っている。

「そわそわの理由」というテーマで話したときのことで。「うんうん、そうだよね」という共感的な雰囲気の中で中盤に差しかった頃、「そわそわ」ってどういう状態なのか、からだでやってみようということになったんです。そしたら、みんな違った。トイレに行きたくてもぞもぞしている人とか、かばんの中の失くし物を探す仕草をしている人とか。同じテーマで話していても、実は頭の中にあったのはそれぞれ違ったのかもしれないというのが印象的な場面でした。

真逆の意見が出てくるのもよいと思

います。「私の居場所」というテーマのとき、居場所はよいものという前提で話が進んでいたんですが、「私は居場所なんていらなと思う」という話が出てきたんです。進行役としてはそういう場面って実はうれしい。話してきたことが別の局面に行けるわけじゃないですか。正解に至る道が一本しか用意されていないのはおもしろくないですからね。

考えの違う人同士が喧嘩になりそうになることもあります。人には価値観が違う相手に「それは違う」と主張してしまう癖がある。でも「私はこう考えるけれど、あなたはこう考

えるんだね」と、違いやズレをそのまま受け止めるやり方もあると思います。

かたりのヴァは障害のある方も場をともにします。彼らは発言するというかたちで対話に混ざらなくても、そこにいるというかたちで参加しています。他の参加者も話を聞きながら彼らの存在を気にしているんです。あるとき、話がまとまりかけて参加者もこれでいいのか首を傾げていたら、たけしくんが飴をパーンとぶちまけたことがあって、「小さくまとまっているんじゃないよ」と言われている感じがしました。

様々な違いを持った人たちがともにいる場では、もやもやと葛藤が生じたり、ときにはぶつかり傷つけ合うこともあります。そんなときに話し合うということは、互いに歩み寄り固定された見方や関係を解きほぐす糸口になるかもしれません。このセクションでは、自分と他人の違いを大切にしたり楽しむことができる、そんな対話や話し合いの実践を紹介します。

こうやってみた！
実践例④

しえんかいぎ

「支援会議」とは、福祉サービスの利用者のニーズによって支援の方向性や内容を検討するために開かれる関係者会議のこと。通常は利用者本人と関わりのある人たちが集まって話し合います。レッツでは、ときに一般参加者にも開かれたかたちで、支援の現場から出てきた悩みや違和感を解きほぐす対話の場を「しえんかいぎ」と呼んで開催しています。



〈問題〉を開いて解きほぐす

特定の物事にこだわりの強いある人が、何かの拍子にどうしても動けなくなってしまうことがあって困っていたときに、そのことを「しえんかいぎ」の話題として話したことがありました。「誰々さんが“かたまる”んですよ…」と話したら、外部の方に「その“かたまる”って、なんですか？」と聞き返されました。そのとき、僕はそれを自分の言葉で言い換えることができなかった。

でも、みんなで話していくうちに、その個人がかたまっているんじゃないかと、彼と周りとの関係性が行き詰まって、お互い

に身動きが取れなくなっているんじゃないかという気づきがあったんですね。逆に“かたまつた”状態が“ほぐれる”のは、「じゃあ、ここで炭酸ジュースのゲップ大会か」とか「ドラマをやってみよう」みたい、彼と僕とが互いに新しい関わり方を発見したときだったと気づいたんです。

これは、自分がそれまで使っていた言葉の意味が、対話を通してまったく違うものになる経験でした。誰か個人に問題があるように見えてしまっているときって、自分が使っている言葉に限界があるからなんだと思います。

特定の誰かに関する話は、その方を知らない人にとっては興味を持ちようがないことかもしれないと最初は心配していました。でも、僕らが日々直面している問題は、簡単には解決策が見つからないものや、問題の設定自体を解きほぐす必要があることが多いので、目先の対応策を決める話し合いではなくて、どうしようもないことだと腹をくくって、どうやって付き合っていくのかという話になります。それは、つまり「私たちはどうやって生きていけばいいんだろう」という話でもあって、誰とでも一緒に考えることができると感じています。

Navigator
ササキ ユーイチ
ヘルパー事業所アルス・ノヴァULTRAのスタッフ。まちで暮らす障害のある人とともに日々のセッションを楽しむ。

POINT

☑ **話し合うことでお互いの違いを味わうことができる**
違いやズレがあることはその集まりの豊かさでもある

☑ **対話によって「問題」の見え方が変わる**
解決を目指すのではなく互いを知ることで問題のあり方が変わる

☑ **話すよりも聞くこと・場をともにすることを大切に**
対話への参加のかたちは言葉を話すことだけではない



「哲学対話」をやってみよう!

あなたのいる場で実際に哲学対話をやってみましょう。
「哲学対話」のやり方は色々なアレンジができますが、ここでは「かたりのヴぁ」のやり方に則ってやってみましょう。

① 話したいテーマを決める。

参考

これまでの「かたりのヴぁ」のテーマは
こちらのウェブサイトをご覧ください。
<https://note.com/katarinova/>



② 時間と場所を決めて、人を集める。

③ 当日は進行役を決めて話し合う。

ルールは、

1. 他の人の話を最後まで聞く。
2. 体験をもとに自分の言葉で話す。
3. 聞いているだけでもOK。

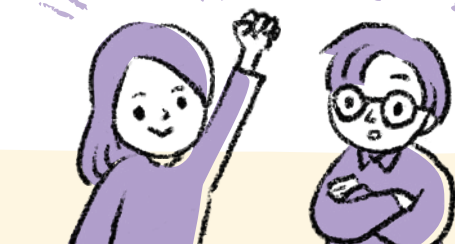
④ 時間になったらおしまい。

**もやもやが深まったり、
新たな疑問が生まれたら大成功!**



わたしも
そわそわの形を
やってみたいなあ

とっても個人的なことが
意外とみんなの
自分ごとだったり…
でも秘密にしておきたい
こともあるよ。



コラム

「学習成果活用事業」で 学びとつながりの機会をつくる

浜松市に住む高橋久美子さんは市内の協働センターなどが窓口となる「学習成果活用事業」として障害のある人のことを伝える講座を開催しました。高橋さんと講座の企画運営をサポートした曳馬協働センターのコミュニティ担当職員・大平智史さんのお二人にお話を聞きました。



— どんな経緯で講座を開催することになったのでしょうか。

高橋 久美子 私長の女はいま30代で重度の知的障害と自閉症があります。彼女は数年前から親元を離れて市内でヘルパーの支援を利用しながら自立生活をしているのですが、それまでは家族と同居して暮らしていました。地域で娘がいろんなトラブルをまき起こすので、もっと障害のある人のことを伝えていく必要があると感じて、障害のある人の家族の会である「浜松手をつなぐ育成会」として2009年から啓発活動を始めました。「浜松キャラバン隊」という啓発隊として、障害のある人の特性や関わり方の工夫を寸劇や朗読、疑似体験のワークショップなども交えて伝える公演活動をしています。

2020年に障害のある人の親の立場から静岡県社会教育委員会に参加する機会をいただきました。調べていくうちに、障害のある人は学校卒業後に学びの機会が少ないことや、地域の協働センターなどで行われている生涯学習にほとんど参加できていない現状を知りました。そんな折に、たまたま回覧板で「学習成果活用事業」を知って、地元で障害のある人のことを伝えるよいチャンスだからぜひ応募してみたいと思ったんです。それで自分の住まいも職場もある地域の曳馬協働センターに行って大平さんとお会いしました。

— 改めて「学習成果活用事業」とは どんなものか教えてください。

大平 智史 「学習成果活用事業」は、浜松市民の皆さんが主体になって講座や教室を企画運営する事業です。ご自身の知識や技術などを伝えたり、地域の課題解決のために生かしたりすることができます。例年4月から5月に実施希望者を公募して、採択されたものを浜松市の主催事業として開催します。

当時、私はまだ曳馬協働センターに配属されたばかりの頃でした。自分のなかで生涯学習の講座という趣味の成果や技術を伝えるものが多い印象がありました。高橋さんからご相談をいただいて、こういった企画が実現できたら新しい形の講座ができたり、地域づくりのチャンスになると感じました。

高橋 私も当初は同じような印象があったので、自分の企画は趣旨と違って採択は無理なのかなと、正直なところ不安でした。でも、大平さんにお話したら「相談しながらつくりましょう」と、背中を押してくれたんです。申請から講座をつくる過程と、本当に親身になってサポートいただいたのがありがたかったです。

— 実際にはどんな講座になったのでしょうか。

高橋 講座は3回シリーズで行いました。1回目は浜松キャラバン隊の公演を動画で紹介したり、障害のある状態を疑似体験するワークショップを行いました。2回目は曳馬地区に住んだり働いている障害のある当事者の家族に来てもらって地域で暮らすために知ってもらいたいことなどの話を聞きました。最終回は臨床心理士の方から支援の方法について学ぶという内容でした。

どうして障害のある人が協働センターに来ていないのかと考えたときに、そこで活動する人や職員が障害のある人のことを知らないからだろうと、まずは自分の暮らす地域のなかでそういった知り合いを増やしていくことが必要だと思ってこういった内容にしました。

大平 実際に高橋さんの他にも当事者の家族からお話を聞くことは、自分にとっても考えるきっかけになりました。通勤途中の電車で出会う障害のある人に対する自分の見方が変わりました。つながりがたくさんあればあるほど、困った時の相談先にもなると感じています。曳馬協働センターとしても、いろんな方が立ち寄りやすい環境づくりに積極的に取り組んでいきたいと思いました。

高橋 障害のある人に向けた特別な機会だけではなく、いろんな人がいる場所に普通に受けられるのがいいなと思うんです。曳馬協働センターは自分にとっては行きやすい場所で、それは大平さんがいて声をかけてくれるからなんです。そういった関係性を大切にしてくれる場所は障害のある人にとっても安心感があると思います。実は今度、家族の念願だった古本屋と居場所を兼ねた店舗を市内で開きます。私自身も誰もが気軽に寄れる居場所になるように力を入れていきたいと思っています。

Profile 高橋 久美子

浜松市浜松手をつなぐ育成会副会長、啓発委員長。2009年に浜松キャラバン隊を立ち上げ、知的障害・発達障害のある人がどんな人かを伝える公演活動を行っている。認定NPO法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会副代表理事。会計・労務のほか、ボランティア活動の企画運営・精神障害のある人の居場所事業を担当。

Profile 大平 智史

浜松市曳馬協働センター・コミュニティ担当職員。2021年から曳馬協働センターに配属となり、地域住民に寄り添いながら、講座や地域づくりのためのイベント等を企画・運営している。「市民と同じ目線に立つ職員」を目指し、住民とのコミュニケーションと信頼関係づくりを第一に業務に取り組んでいる。



SECTION 03

混ざるとうまれるあれやこれ…

こうやってみた！
実践例⑤

ちまた公民館

浜松市の市街地にある10坪ほどの空間で運営している私設公民館。無料で過ごすことができ、遊ぶ、休憩する、お喋りする、勉強や創作など、何をしても・しなくてもよい場所。精神障害や発達障害のある方、近所の小学生やお年寄り、仕事の帰り道の方、ホームレスの方など、日々さまざまな人が立ち寄りたり過ごしたりしています。



Navigator

久保田 瑛、水越 雅人
杉田 可縫

まちづくりと福祉の連携企画「浜松ちまた会議」を担う久保田瑛さん、子どもの居場所に関心のある杉田さん、精神障害のある人の仕事や活動の支援をする水越さんの3人が、ちまた公民館をわいわい悩みながら運営する。

「バツじゃない」あり方を探って

限られたスペースのなかでいざこざが起きたり、他の人のふるまいを怪訝な顔で見ている人がいたり、止めたほうがいいのか…とモヤモヤする出来事が起きたりすることもあります。そんなとき、ルールを増やしたり禁止事項をつくったりすれば、安全な場になるのかもしれない。でも、それだとも何もしない場になってしましますよね。そうじゃなくて、相手の話を聞いたり背景を知ったりすると価値観や習慣の違いが見えてきて、自分が普段いかに狭い枠のなかでコミュニケーションしてきたかということに気付かされます。

運営するスタッフもそれぞれです。じっくり話を聞く人もいれば、ドライな対応をする人もいます。適切な関わり方は状況や相手との関係によっても変わるんじゃないかな。全員にとって完璧な「マル」でなかったとしても「バツ」でなければいい。悩みが多いほど一つ一つは取るに足らないことだったと気付けるかもしれない。

関係が煮詰まるなら、もっと人目のある広い場に出ればいいとも



思っています。2023年からは「出張ちまた公民館」と題して、浜松市内外のいろいろな場所に出かけて居場所をつくる試みを始めました。特に近所にあるクリエート浜松という複合文化施設の広場を定期的に借りて出張しています。そうしたら、同じ建物で地域の多文化共生づくりを行っている団体が声をかけてくれて、一緒にペルーやブラジルの方とダンス体操するイベントや、異文化交流の新年会を開くことになりました。新しい出会いがあることで、これまでの関係や役割が変わっていくのが面白いです。

最後のセクションでは、多様な人が会える場づくりの実践とそこで大切にされている考え方を紹介します。場をともにする人同士の関係や役割はときに固定して行き詰まったり、動的に変わっていったりもします。他人のあるがままに出会って揺さぶられることで、初めて自分の譲れないものに気づくこともあります。多様な人がともにいることでうまれるものごとについて、改めて考えてみましょう。

こうやってみた！
実践例⑥

みにみにアルス・ノヴァ

障害福祉施設アルス・ノヴァに通う重度知的障害のあるメンバーとスタッフが、昼休みの小学校の校庭に定期的に出張して過ごす企画です。お膳立てした「健常者と障害者の交流」ではなく、お互いに関わってもいい関わらなくてもいいのが特徴。小学生の日常風景のなかに、よくわからないけれど気になる存在がなんとなくいて、自由な質問をすることもできるという体験をつくれます。



わからないことをともに楽しむ時間

子どもにとって、教室で質問をするには「はい!」と挙手する勇気が要るけれど、ごはんを食べながらとかボール遊びしながらだったら、疑問に思ったことを訊ねてくるんですよ。休み時間の校庭って子どもはリラックスしている場面で、そこに出会ったこともない障害のある人がいると、気になる子は聞きにくる。例えば「どこが悪いの?」「誰が障害者なの?」「子どもなの?大人なの?」とか。

それに対して、私は「私もわからないんだ」とか「どう思う?」みたいに返しています。実際に、スタッフもわから



ないから探ったり、やりとりの反応をみて考えたりすることが常だから。そうすると「わかったこと」にはならず、子ども自身が考えてくれる。混ざって起きるさまざまなことを楽しめるところであるためには、わからないことを楽しめたいと思います。相手をわかってからとか専門知識がなければ関われないんじゃないかと。

学校教育では健常/障害や年齢によって同質な集団に分けられるので、意図的に混ぜる場をつくらないと同じような人だけの社会が世界だと思ってしまう。そういう点で休み時間は混ぜるのにぴったりな時間です。

健常者と障害者が混ざるというと正確ではなく、すでに場のなかにはグラデーションのようにいろんな人がいると知ることだと思うんです。小学生のなかにも普通の枠に苦しんでいる子はいて、多様なことや違うことが楽しい場に安心感を抱いているように見えることがあります。



Navigator

夏目 はるな
障害福祉施設アルス・ノヴァの学校事業担当。子どもや若者が「普通」に囚われずもっと色々な人に出会わなければ!と焦っている。

POINT

✓ 自分の当たり前が揺さぶられる葛藤を楽しもう

いろんな人のなかに自分がいると、からだと思いがほぐれていく

✓ 完璧さを求めない余白が、ともにいることをつくる

関係は時と場や人によって変わる。出会いも別れも再会もある

✓ わからないことを楽しめるゆるさと気軽さ

専門知識より大切なのは気になる気持ち、わからないことは出会いのきっかけ



居心地のよさってなんだろう？

あなたはどんな時に、どんな場所で、どんな人や物に、居心地のよさを感じているのでしょうか？
周りの人とも一緒に居心地のよさについて考えてみましょう。

1. あなたが「居心地のよさ」を感じた具体的な場面を書いてみよう。
2. あなたの周りの人に「居心地のよさ」について聞いて書いてみよう。
3. あなたと那些人たちがともに居心地よくいられる場面に、タイトルをつけて描いてみよう。

場面のタイトル「 _____ 」

参考

居心地のよさや居場所については、ライター・原菜月さんがちまた公民館の日々について綴ったコラムシリーズもぜひご覧ください。



風を感じるのが心地よいからずっと動いていたいな～

同じくらいの密集感でも、都会のスクランブル交差点はいやで、賑やかな居酒屋は居心地がよいの、なんでかなあ？



認定NPO法人クリエイティブサポートレッツは、文部科学省「令和4年度 学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」、
「令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」を受託して、主に重度知的障害のある人の生涯学習の機会をひろげる事業を行ってきました。キーコンセプトは「ともにいるだけで学びになる」。障害のある人を含む多様な人同士が出会い、ともにいることで、わたしたちのコミュニティにとって豊かな学びが生まれると考えています。

令和4年度 | パンフレット

「ともにいるだけで学びになる ～福祉とアートの現場から～」

クリエイティブサポートレッツは、文部科学省「令和4年度 学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」として、2023年1月21日(土)にく共に学び、生きる共生社会コンファレンス「ともにいるだけで学びになる～福祉とアートの現場から～」を開催しました。

事業内容やコンファレンス内容をまとめたパンフレットをウェブサイトにて公開しています。



令和5年度 | アーカイブ動画

「ともにいるだけで学びになる ～これからの協働センターはどうあるべきか、その可能性を考える～」

クリエイティブサポートレッツは、文部科学省「令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」として、2024年2月5日(月)にく共に学び、生きる共生社会コンファレンス「ともにいるだけで学びになる～これからの協働センターはどうあるべきか、その可能性を考える～」を開催し、社会教育の関係者、福祉の関係者、関心のある市民が集い、これからの地域コミュニティの核としての役割を担う協働センターの可能性について議論しました。

コンファレンスのアーカイブ動画をウェブサイトにて公開しています。



[開催概要]

文部科学省「令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」

共に学び、生きる共生社会コンファレンス

「ともにいるだけで学びになる～これからの協働センターはどうあるべきか、その可能性を考える」

日時 | 2024年2月5日(月)13:00-17:30

会場 | クリエイト浜松 2階ホール

主催 | 認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ、文部科学省

後援 | 浜松市

同時開催 | 出張たけし文化センター連尺町+出張ちまた公民館(クリエート浜松 ふれあい広場にて)